

北斗市二股台場における新政府軍陣地

箱館戦争戦跡調査プロジェクト 石井淳平

2021年12月4日

概要

明治2年の箱館戦争に際して構築されたと伝えられる北斗市二股台場から二股川を挟んだ西側に新たな塹壕を確認した。この塹壕は二股台場に対面し、二股川へ下る道跡と組み合わせて機能したと考えられる。二股台場の北側尾根からの射撃に対抗して、これと対峙し牽制するための機能を有する新政府軍構築による塹壕跡と評価する。

1 はじめに

北海道の南西部、北斗市山中の台場山に、「二股台場」（北海道教育委員会埋蔵文化財包蔵地「台場山遺跡」(B-06-102)）として知られる塹壕群が残されている（河野 1924, 毛利 2012）。これらの塹壕は、明治2年（1869）の戦いで旧幕府軍が構築し、2度にわたる新政府軍の攻撃に耐えたことが知られている（大鳥ほか 1998）。本塹壕群の特徴は、長い射程と高い命中精度を有する施条銃の特性を活かし、正面射撃と側面射撃を組み合わせ、台場西側の平坦面に火力を集中的すべく構築されたものと評価した（石井ほか 2020）。

本調査では二股台場から二股川を挟んだ西側でこれまで知られていない塹壕を発見した。この塹壕を報告するとともに、可視領域の分析による構築意図を推測した。

2 明治2年箱館戦争と二股台場の位置

2.1 明治2年箱館戦争

明治2年4月9日、旧幕府軍に占領された蝦夷地奪還のため、新政府軍は北海道南西部の乙部に上陸した。新政府軍の攻撃軸は松前口、二股口、安野呂口の3本が設定され、南蝦夷地の要衝である江差、松前を経て箱館へ至る松前口とそこから分岐した木古内口に最大の兵力が割かれた（大鳥ほか 前掲）。二股口は松前口に次ぐ兵力が派遣された（図1）。二股口は険しい山道の進軍を余儀なくされるが、強固な防御拠点もなく、兵力に乏しい旧幕府軍兵力の分断と各個撃破を図ったものと考えられる。

2.2 二股台場の位置

二股台場は北斗市大野町市街地から北西約10km上流の大野川左岸、大野川とその支流である二股川の合流点付近に位置する（図2）。大野市街地から二股川付近までは大野川に沿って平坦な地形が続くが、二股台場塹壕群の所在する尾根を境に、これより上流では尾根と谷が交互に現れる急峻な地形となる。

二股台場塹壕群は標高261mの台場山と、これと一連の尾根をなす339m峰との間の尾根上に確認され

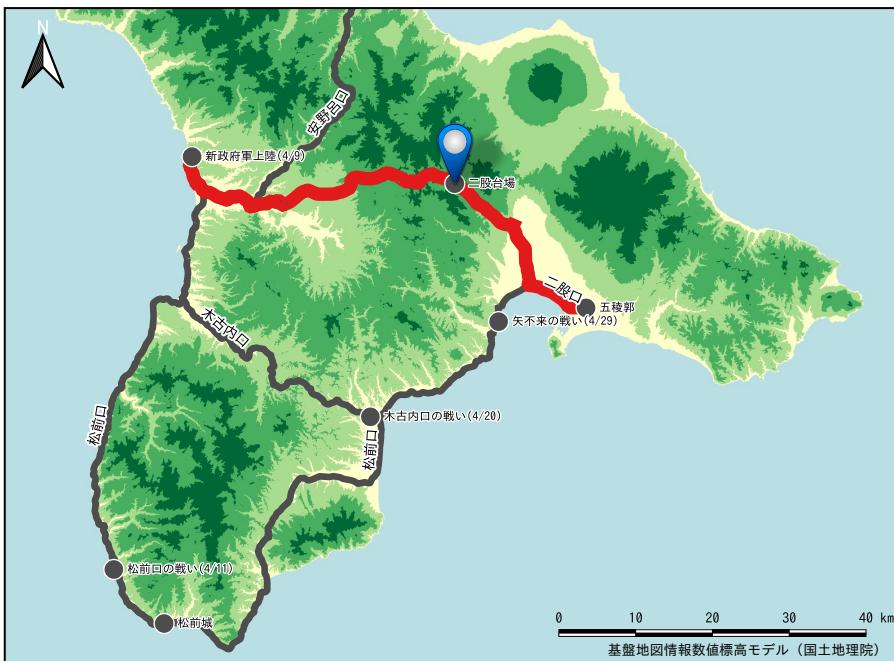


図1 明治2年箱館戦争と二股台場の位置

ており、二股川と並行して北方から大野川にむかって傾斜する尾根上に配置される。最高地点に立地する塹壕は標高約330m、最低地点に立地する塹壕は標高約200mである。尾根の鞍部を旧道「鶴山道」が横切っており、塹壕群は鞍部をはさんだ南北の尾根に構築される。

3 新政府軍塹壕

新たに検出したS01は二股川に面した西岸に位置する。東側は急傾斜となっており、二股川へ直下することは困難である。二股川へ下る道筋は複数存在したと考えられるが、S01東側には旧道と思われる道跡があり、つづら折れに二股川へ下る（図3）。S01はこの旧道に接した西側に位置する（図4）。

塹壕は2本認められ、二股川に近い下位塹壕で長さ約10m、二股川から遠い上位塹壕で長さ約25mである（図5）。塹壕の深さは深いところで約1.8mである。

4 S01の可視領域

S01の可視領域¹⁾は二股台場の塹壕群の所在する台場山尾根の大半を含み、ほぼすべての塹壕を視界に捉えることが可能である（図6）。逆に言うと、S01は二股台場のあらゆる塹壕から攻撃目標となり得る地点である。特に鶴山道北側に位置するF08、F09、F10、F11はいずれも平面距離で300m以内であることから、相互に脅威となる位置関係である。

1) 可視領域の算出にはGRASS GIS versin7.8.2のr.viewshedコマンドを利用した。

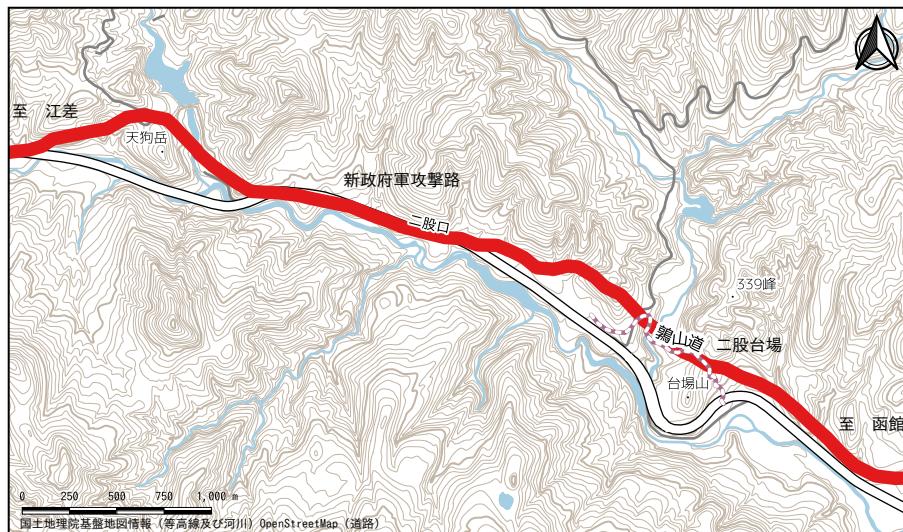


図2 二股台場周辺の地形



図3 S01 東側の通路（写真奥が二股川上流方向）



図4 S01 上位塹壕全景（南から）

5 考察

5.1 S01 の選地とその意味

二股川は両岸が切り立った崖となっており、とくに大野川に近い下流側は深い渓谷である。川底への降下、渡渉、対岸の崖上に上がるまでのいずれの行程も急傾斜の降下、登坂を余儀なくされる。一方、上流側は比較的緩やかであることから、渡渉地点は鶴山道より北側が選定された可能性が高い。S01はこうした渡渉地点へ向かう通路に配置されている。無防備となる二股川渡渉に際して、一時的な退避場とすることや対岸の二股台場に対して牽制射撃を行うことが目的と考えられる（図7）。

次に、渡渉した部隊が強力な十字砲火によって孤立・殲滅することを防ぐため、二股台場に対抗して援護射撃を行い、二股台場側の目標を分散させる狙いもあったと推測する。S01は二股台場のほとんどすべての塹壕を射角に入れていることから、必要に応じて援護射撃を行い、二股台場側の攻撃をS01に引きつけることで、二股川東岸への渡渉を果たした新政府部隊への集中砲火を緩和する機能を有していたと推測

する。二股川対岸の S01 からの射撃によって、渡渉部隊に向けるべき二股台場側の火力の一部を S01 に振り向けることを強要したと推測する。

5.2 結論

二股台場をめぐる攻防戦では小銃が主兵器として用いられた。旧幕府軍ではミニエー銃弾を使用する前装式施条銃、新政府軍ではこれに加えて後装式施条銃が用いられた。これらの施条銃の銃撃開始距離は「300 メートル弱から 500 メートルくらい」とされ（保谷 2007: 215）、滑腔銃に比較して、射程距離と命中精度が大幅に向上し、散開戦闘が歩兵部隊の基礎的な戦術様式となった（保谷 2013）。二股台場はこうした施条銃の性質を活かし、渡渉した新政府軍部隊を段丘上の平坦面で効果的に制圧する防御戦を構想していたことはすでに指摘したとおりである（石井ほか 前掲）。一方、新政府軍においても、一方的な集中砲火を軽減するために、二股川対岸や側面から牽制射撃を繰り返したものと考えられる²⁾。

本調査で確認した二股川西岸の S01 は、新政府軍が二股川を渡渉する部隊を援護するとともに、二股川東岸に着岸した新政府軍部隊に集中する銃撃を緩和するため、あえて二股台場の各塹壕の射角内に構築し、牽制射撃を行うと同時に二股台場からの攻撃を引きつけ、目標を分散させる意図があったと読み解きたい。

引用文献

- 石井淳平・野村祐一・塙田直哉・時田太一郎 2020 「北斗市二股台場の測量調査—箱館戦争戦跡の考古学的調査—」『北海道考古学』第 56 輯 pp.35-54
- 大鳥圭介 1998 「南柯紀行」『南柯紀行・北国戦争概略衝鋒隊之記』新人物往来社 pp.7-158
- 大野右仲 1995 「函館戦記」『新選組史料集』新人物往来社 pp.348-362
- 河野常吉 1924 『北海道史蹟名勝天然記念物調査』北海道立図書館所蔵,1974 年復刻版『北海道史蹟名勝天然記念物調査』名著出版 pp.88-91
- 保谷徹 2007 『戊辰戦争（戦争の日本史）』18 吉川弘文館
- 保谷徹 2013 「施条銃段階の軍事技術と戊辰戦争」 箱石大編『戊辰戦争の史料学』 勉誠出版 pp.61-87
- 毛利 剛 2012 『二股口台場』自遊出版工房

2) 『函館戦記』（大野右仲）では二股川の下流を回り込み、側面から二股台場を攻撃しようとした新政府軍が下流側にも旧幕府軍の備え（塹壕の配置）があったことを知り驚くとの記述がある。正面から突破が困難な二股台場に対して、側面からの攻撃により新政府軍正面への脅威を緩和しようと試みていたことがわかる。

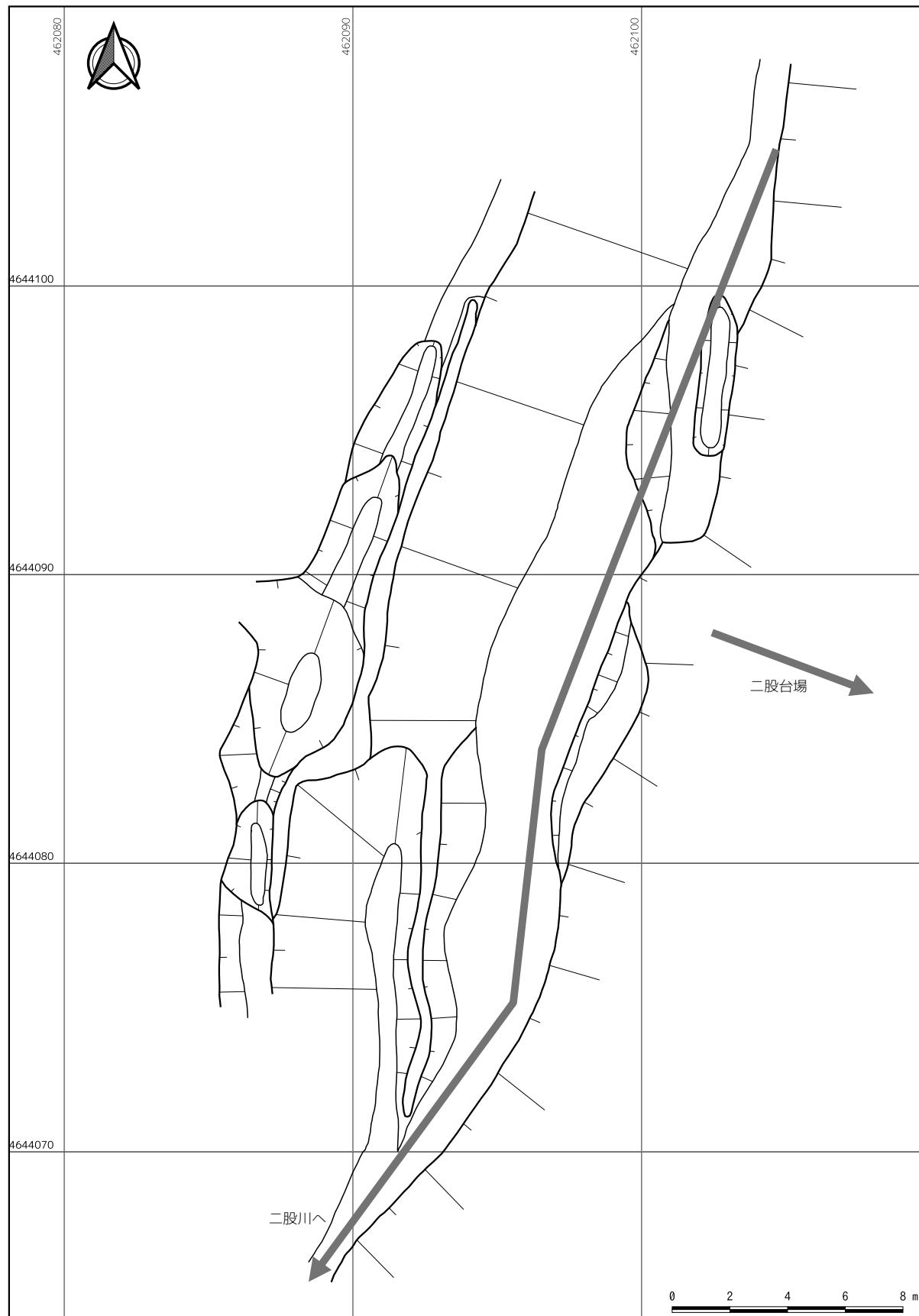


図5 S01 平面図

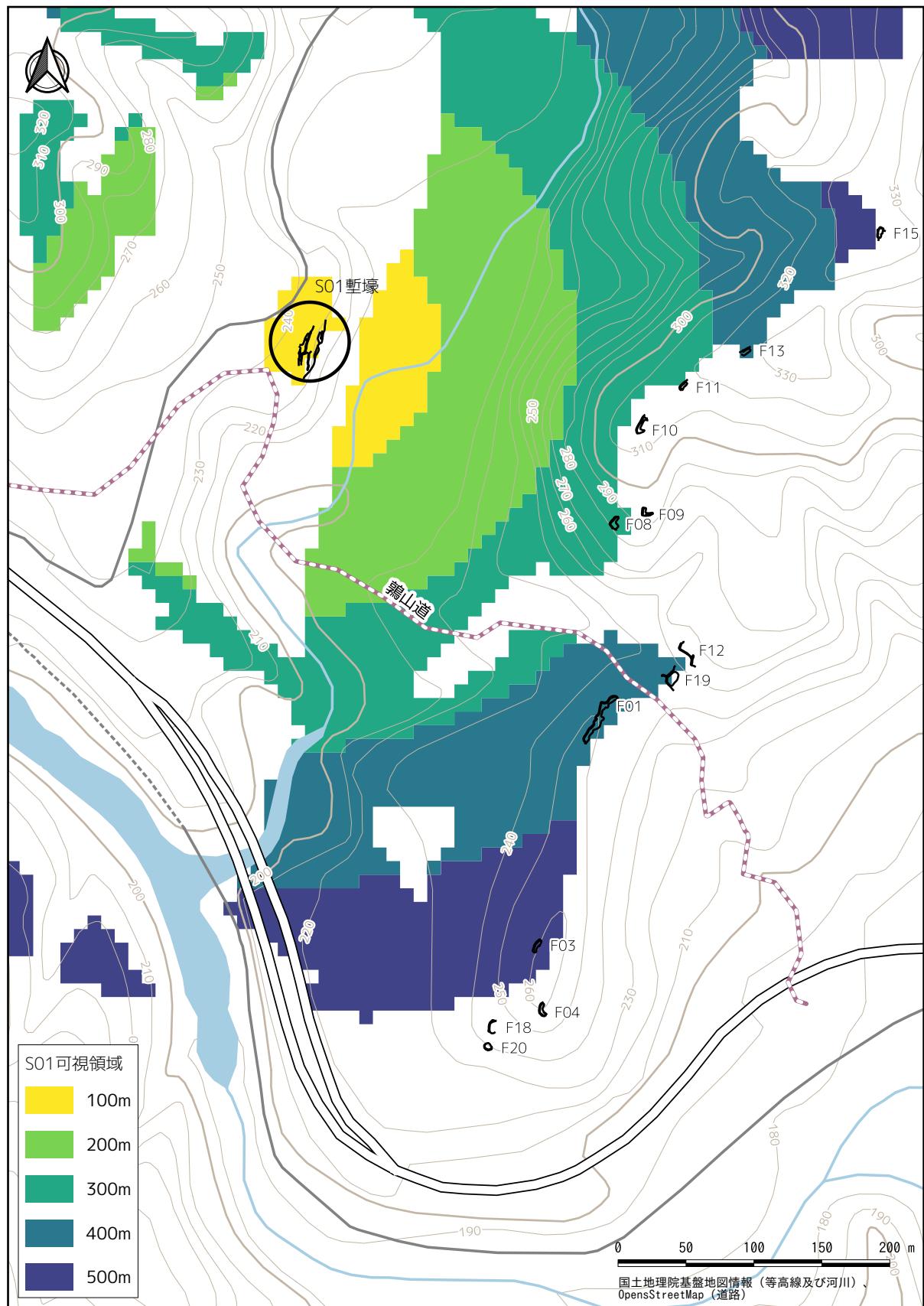


図 6 S01 可視領域

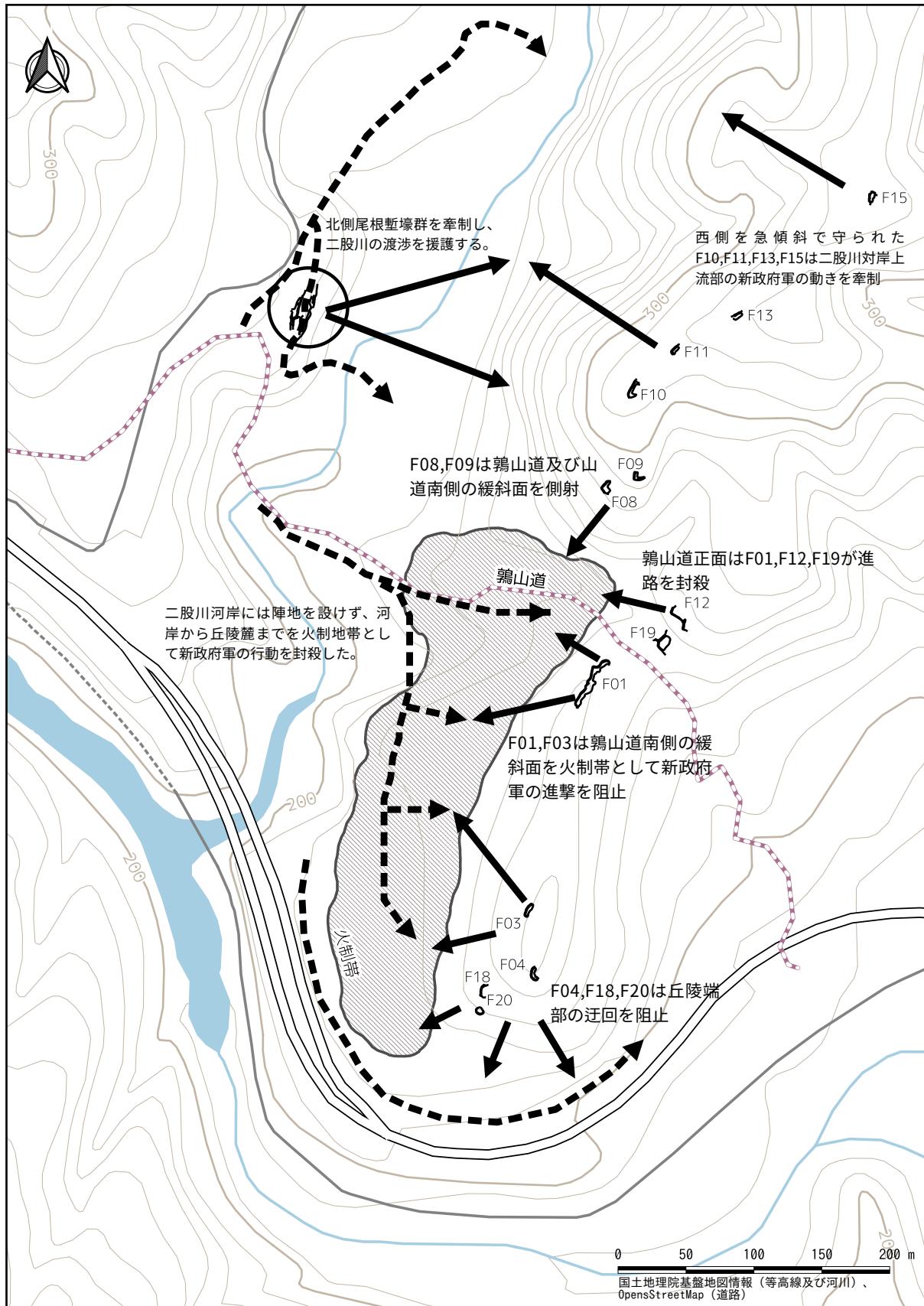


図7 二股台場戦闘模式図

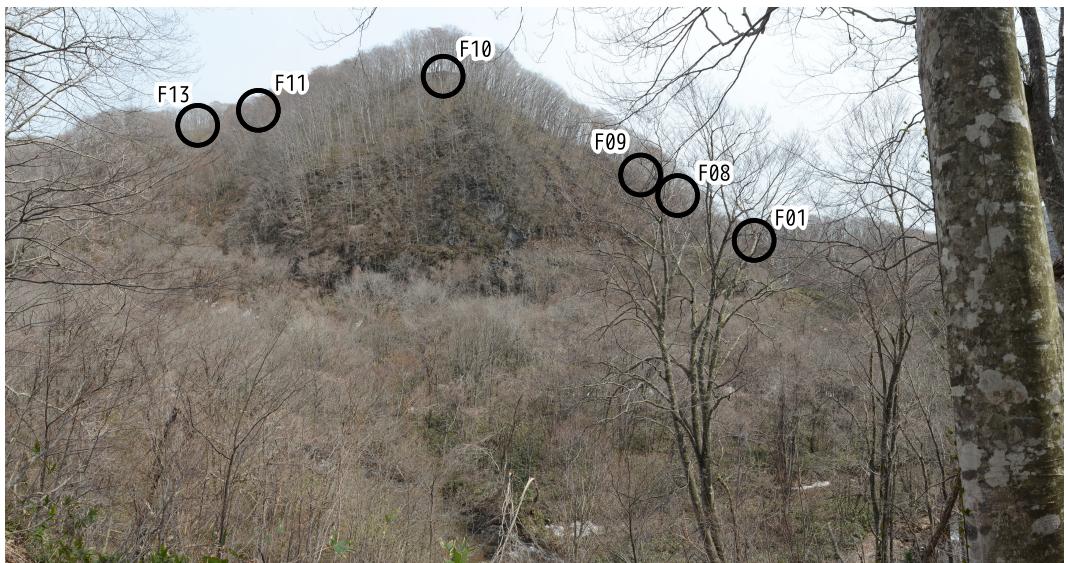


図 8 S01 から眺望する二股台場